## 図書館長賞

「ないものねだり」

経営学科 4年 宮下 颯一朗

このコロナ期間中に気づいた新しい自分がある。それは、自分が思っていたより「寂しがりや」だということである。

私は、実家で生活していた高校生まではどちらかと言えば一人の時間を好きで、家では 自室に籠っていることが多かった。だから、大学生になってからの一人暮らしはまさに楽 園のようで、自分1人しかいない空間で、自分だけの時間を過ごすことがとても幸せだっ た。

しかし、コロナウィルスが流行し始めて家で過ごす時間が増え、1日のうち1人で過ごす時間が大半を占めるようになると急に寂しくなった。コロナ前と比べて友達と電話をしたり、密にならない範囲で家に招待し一緒に遊んだりする機会が増えた。

この時私は、自分に心境の変化が起きたように思え違和感があった。しかし、それは違った。私にとって家族と過ごす時間や、大学で友達と食堂で何気ない会話をする時間という今まで当たり前に存在したものは、かけがえのない時間だったようだ。周りに人がいることが当たり前の時は1人の時間を求め、周りに誰もいないことが当たり前になると人と一緒にいる時間を求める。一見矛盾しているように見えるが自分にとってどちらも大切な時間だった。

今後日本でのコロナウィルスの流行はどうなっていくか分からないが、私は、再び友達と一緒に外で当たり前のようにご飯を食べたり、話したりできる日が来ることを願っている。だが再びその時が訪れると、「1人の時間が欲しいなー」と思っているに違いない。